

父からの手紙

評議員 八代 元行

このたび「育てる」に寄稿させて頂くにあたり、私の人生の中で多くの先生や先輩たちから、いろいろ示唆に富んだ言葉をたくさん頂いたことが思い出され、そのどれもが私を育ててくれたものであったと改めて感謝する機会となりました。その中で特に私を育ててくれた言葉は、生後間もない私に宛てた父からの手紙でした。

私は戦後まもなく太平洋の荒波が目の前に迫る房総の村で生まれました。父は三十二歳で母と地元で電気屋を営もうと約束をしていました。地元にこだわったのはそこを離れられない理由があったからです。物資が不足していた時代に不治の病といわれた結核に冒されていたので、空気も澄んで栄養価の高い食糧に恵まれた地で治療を優先する生活をせざるを得なかったのです。

そのような父の下に子供が授かることになり、それはそれは喜んでいたと母からよく聞かされました。しかし一方で、自らの身体を蝕む病の進行は自覚しており、子供の誕生が近づくにつれ、わが子を抱くことも頼ずりすることも叶わないその無念さは、声の掛けようもないほどであったそうです。病弱であった父が、生まれくる子にしてやれることは、自分の想いを手紙に託すことだけでした。

涙とともに（坊やにみせる詩）

坊や、父ちゃんは坊やに対してほんとに済まないな。かう病んでゐると着物一つ買つてやるでなし、病気をうつすといけないので、あやしてやる事も出来ず、しょっちゅうお前から逃げるやうに遠ざかつてゐるのなもの。ほんとにお前は生まれた日から、かはいそうな父無し子のやうだね。

坊や、けれどね父ちゃんは、ほんとに坊やが可愛いくてくどうしようもないほど可愛いんだよ。一日一度階下へ下りていって、お前の寝顔をみる事がどんなに楽しいことか。

お前が、うーんといって肉のくびれた両足を思い切りつっぱってカミかへる恰好や背中を丸くしてかいて貰うのを待つ恰好や生まれたての鬼の子のやうにのびたお手々の爪

までが、父ちゃんをどんなに喜ばせ微笑ますことか。まして天使のやうなお前の寝顔のぞいてゐるといつまで経つてもしびれの切れるのさへも忘れてしまふよ。

此の間三月十九日のことだった。もうすっかり春の陽ざしとなつた暖い縁側で久しぶりにお前を抱いたつけ。うぐいすが何処かで鳴くとお前はキョトンとした顔をその方に向けて聞き耳をたてていたが、ふと父ちゃんの顔を見付けてニコ／＼と笑つた、もしお前の口がきけるなら「アツ父ちゃん!」といったかと思はれるやうな無条件の信頼と安心をこめたその笑顔!トタンに父ちゃんはお前を頼ずりしたい衝動にかられた。

だけど……。ゆるしておくれ。坊や、父ちゃんはそれが出来ないのだよ。父ちゃんはそれがつらい。ほんとにつらい。父ちゃんはそのつらさをかくす為お庭の青草の上に顔をそむけた。暖い春の光がふりそそいで、草はすく／＼と延びてゆく、坊やもあの若草のやうに丈夫で育つよう、せめて今の父ちゃんは神様に御祈りしていよう。

坊や、あんよを出して御覧、丈夫になるやうにお陽さまに当てようね。貝殻よりも可愛い小さなお前の足をお陽さまに当てながらお前の足から父ちゃんの手には伝はるぬくもりを父ちゃんはほんとに親子の血の流れを感じた。坊や、父ちゃんはどんな事があつてもお前の父ちゃんだよ。そして父ちゃんは命にかへてもお前を愛してゐるよ。

けれど、こんなにもお前を愛してゐるのに、愛すれば愛するほどお前から遠ざからねばならぬかなしさ、ああ、それを思うと父ちゃんは声をあげて泣きたくなるのだよ。だ

けど坊や、かういったぐちや感傷はもうやめようね。父ちゃんは今病気で心が弱くなっているんだよ、

こんなに枕を濡らすほど涙をながすなんて・・・。おかしいね、さあ、父ちゃんは一生懸命早く癒くなって坊やに頼ずり出来る日までちっとこらへて、我慢するぞ。

その代り、父ちゃんが快くなったら、坊やは父ちゃんのくびにかぶりついておくれ！父ちゃんは坊やをひざにのっけて、二人でゐるりで火に当たらうね。」

（坊や百一日の祝日、昭和二十三年三月二十二日作）

と記されていました。他界する半年前でした。

親の情は無償の愛でありどなたも同じですが、お蔭さまで私も愛情深い親の元に生まれ落として頂きました。特に父に抱いてもらった温もりも、教育的示唆に富んだ言葉の記憶もなく育ちましたが、私にはこの手紙から感じる溢れ出る愛情が何事にも勝る教育でした。

やしろ・もとゆき

株式会社第一成和事務所取締役会長、公益財団法人育てる会評議員、公益財団法人日本橋法人会副会長、社会福祉法人全国盲ろう者協会監事。大学卒業後(株)千葉銀行に入行。二十九歳の時、保険代理店(株)第一成和事務所に入社。四十二歳で代表取締役社長に就任。六十五歳で取締役会長就任し現在に至る。